２πｒ通信（2023年8月号）R5/８/12　海老名精神保健福祉促進会「２πｒ」

本日は午後１：30～オープンダイアローグの第ニ回目の学習会。リードして下さるのは前回と同じ阿部千津さんと渡邉晴美さんです前回の参加者は22名。今回は30数名になりそうです。会場は１階娯楽室に変わりました。今回もご一緒に「対話」について学びましょう。

［報告］

＊7/8（土）13:30～15:30　第１回オープンダイアローグ学習会　　福祉会館第１，２会議室

＊7/10（月）～14（金）　社会福祉協議会主催　障がい者の暮らしの支援パネル展

＊8/1（火）（じんかれん研修会）講演会　　10：00～12：00　　県民センター304会議室

「精神障害のあるなしにかかわらず平等な社会を作るために」　　（　３名参加　）

～精神科特例などの不平等な医療を無くす～

講師：　池原氏（東京アドヴオカシ―法律事務所長・弁護士）

感想：「皆さん、精神科で差別されていると思うことはどんなことですか？」という質問から講演が始まりました。手抜きの差別的医療として「精神科特例」を先ず挙げ、本人の考えや気持ちを大切にしたインフォームドコンセントを徹底すべきであること、そしてなんと「オープンダイアローグ」の紹介がありびっくり。さらに真の自己決定は「対話」によって決定されることや医療や福祉は強制力を使ってはいけない、など、まさに私たちが日頃から感じて居ることをいくつかズバリ述べてくださいました。また日弁連が精神障がい者の権利擁護のため、本気で国に働きかけてくれているのだということがわかり、大変うれしく、心強く思いました。じんかれん（家族会）もこういう弁護士さん達と手をつなぎ、人権侵害甚だしい精神科の医療や他の障害にかなり遅れている精神保健福祉の改善に取り組んで行くべきだと思いました。　(H.S)

＊7/28（金）10：30～12：00　障がい福祉関係団体と市長との懇談　市役所

◎福祉会館の利用申込込方法が変わります。今秋に会館内のインターネットの環境が整うことになり、１０月（１２月分予約）より、ネット予約になります。それで10月申込（12月使用分）からは２πｒのインターネットに詳しい岩原さんに予約をお願いすることになりました。　岩原さん宜しくお願いいたします。

［予定］

＊8/21（月）13：30～13：55　障がい福祉関係団体と市長の個別懇談（役員とＭさん参加）

＊10/3（火）10：00～12：00　じんかれん研修会　神奈川県民センター304会議室➡チラシ

家族相談の意義とその対応 ～家族が元気になるヒントになれば～

講師　みんなネット事務局長補佐　　高村 裕子 氏

＊11/11（土）13：00～16：00　じんかれん 第49回県民の集い in 小田原　　➡チラシ

◎９月９日（土）　２πｒ定例会と市との懇談　　福祉会館第１，２会議室にて

（１）９月定例会　10:30~ 12:00　　（２）市障害福祉課との懇談　13:30 ~15;30

あなたは精神科の身体拘束をどう考えますか？

（7 月上旬の東京新聞に精神科病院の身体拘束などに関する、精神科病院協会長山崎氏の肯定的な発言が載り、その後それに反対する意見記事が同新聞に 2 件載りました。）

［山崎会長の発言］　　（ある精神科看護師さんの意見）

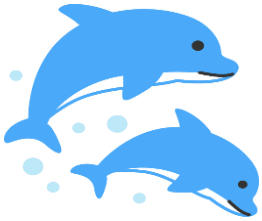
本誌のインタビューで精神科病院協会長である山崎氏は、身体拘束への批判に対し異議を唱え、記者を叱責した。私は精神科で長く働き、身体拘束も行ってきました。それでも、この発言は受け入れがたい。　年間 1 万件と言う精神科病院での拘束を見れば、基準が適正であるか、疑問が出るのは当然だ。身体拘束も隔離も人権を侵す行為。それを自覚し、常に厳しく、必要性を問わねばならない。

残念ながら、身体拘束を避けられない状況はある。具体な例としては、指で眼球を傷つける、肉をはぐなどの自傷行為。道具を使わず、自分の身体だけで行う自傷行為は、隔離のみでは防げず、身体拘束が止むを得なかった。

逆に言えば、身体拘束を要する例は、このような突発的な自傷など、極めて限定的である。私自身は、人手を増やしても防げないかどうかを納得の基本にしている。

私は今後も仕事を続け、隔離や身体拘束に全く関わらないとは断言できない。しかし、社会が拘束の必要性を理解し、認めてほしいとは思わない。社会は拘束する私たちに厳しくて良い。

身体抑制に理解がある社会は、「精神障がい者は縛られても仕方がない」と考える社会。理解を求める発言には与（くみ）せない。



「身体拘束受ける立場想像を」　　（ある主婦の方の投書）

特報面「精神科病院協会山崎会長に聞く」は衝撃でした。息子は重度の知的障害があり、医療を受ける場合に精神科病院に入院する可能性もあるからです。滝山病院虐待事件の時には日本精神科病院協会理事会声明で「会員病院でこのような不祥事件が発生したことは慙愧（ざんき）に堪えません。深く陳謝申し上げます。」と謝罪していたのに、「地域で見守る？　誰が？　あんたできんの？」と持論を展開していました。

山崎氏がここまで開き直るのは、おそらく、精神障害者に対する社会の偏見と、警察や行政、家族が精神科病院に頼っているという現実に裏打ちされた自信があるのでしょう。問われているのは、精神障害者を受け入れていない社会のありようだということです。

しかし、誰もが精神障害者や認知症になる可能性があり、誰もが身体拘束を受ける立場になることも想像しなければならないと思います。テレビ番組で、身体拘束を是認していた看護師が自分の両手両足を縛られる体験に「これは厳しい、これを（自分は）やっていると思うと悲しくなりますね。悲しすぎて涙が出てくる」などと語っていました。

山崎氏を含めすべての病院の医療従事者は、研修の中で身体拘束を経験する必要があると思います。同時に、地域で暮らす人の生活を見たり、縛らない病院での研修も受け、本当に入院の必要があるのか、縛る必要があるのかを本人の立場から考えてほしいと思います。